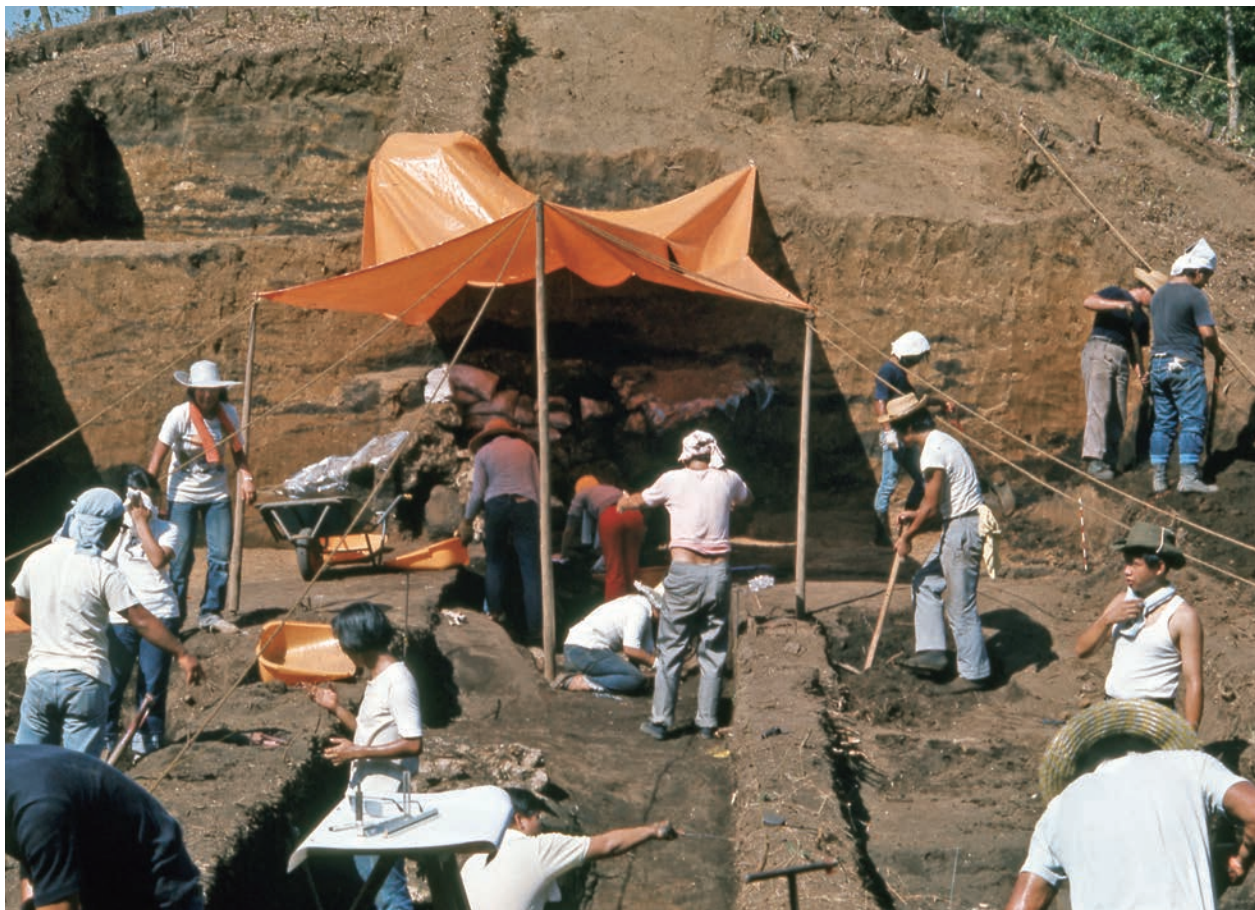


ひたちなか 埋文だより

58



虎塚古墳の石室の調査へむけて

測量調査が終了した 1973 年 8 月 22 日から埋葬施設の確認作業がはじまり、後円部南側のトレンチ調査で横穴式石室の存在を確認しました。入口となる羨道部には、人頭大くらいの石が閉塞のために積まれた状態でした。8 月 31 日、石室の扉を開ける前に、東京文化財研究所が石室内の環境調査を実施しました*。調査の結果は、外気温が約 32 度あるのに対し、石室内は 15 度、湿度は 90%、炭酸ガス濃度も外気の 50 倍という成果を得ました。この時点で、石室に壁画があることはわかっていません。環境調査は、あくまでも奈良県の高松塚古墳の壁画の保存のためのものでした。そして、扉石が開かれ、予想もしなかった壁画が現れます。（1973 年 8 月）

CONTENTS

第19回企画展 弥生時代中期の祈り－墓から出土する管玉－

公開講座「ひたちなか市の考古学」第15回 弥生時代の玉

「私的茨城考古学外史－遺跡・人 出会いと別れ－」 第7回 発掘三昧への道 県内編4（瓦吹 堅）

大塚初重先生追悼特集 馬渡埴輪製作遺跡調査と大塚先生（阿久津久）・虎塚古墳調査と大塚先生（宮内良隆）

横穴墓を歩く② 鍋田横穴墓群（佐治健一）

ひたちなか市内の発掘調査 2022

資料紹介 虎塚古墳出土の土器（稲田健一）

のぞき見、展示室⑤ 独鈷石

ワンケース・ミュージアム 57 虎塚古墳、再考！

歴史の小窓② 十五郎穴と正倉院の大刀

ほか

*実際には石室閉塞石前の空間でした

第19回企画展

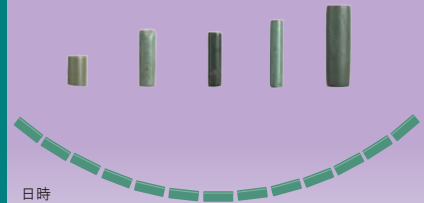
弥生時代中期の祈り —墓から出土する管玉—

2023年2月11日(土)～5月7日(日)

開催

第19回企画展

弥生時代中期の祈り —墓から出土する管玉—



日時
令和5年 2月11日(土・祝)
～ 令和 5年 5月7日(日)

休館日 月曜日(休日の場合は翌日)
開館時間 9:00～17:00(入館は16:30まで)

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
茨城県ひたちなか市中根3499 TEL. 029-276-8311

入場
無料

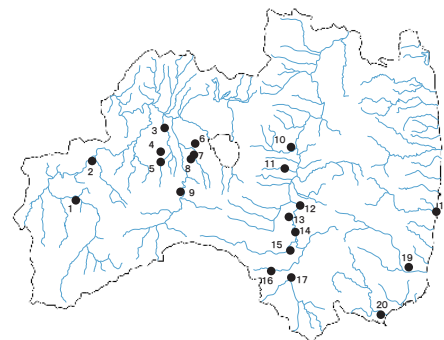
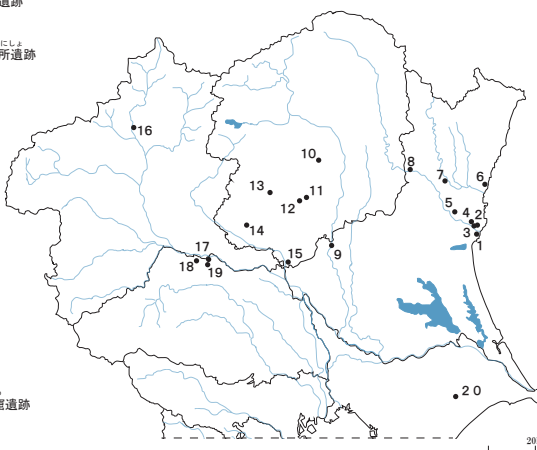
弥生時代中期の墓には、一度土葬にして白骨化した頃に掘り返し、遺骨を土器に入れて埋葬する「再葬墓」、土器棺に入れて埋葬する「土器棺墓」、土坑を掘りそこへ直接埋葬する「土坑墓」などがあります。その様々な埋葬形態の墓から出土した土器から、これまでに遺跡の性格や地域での交流が検討されてきました。一方で墓からは、主に副葬品として碧玉や緑色凝灰岩など、緑色の石材を使用した管玉などの玉類が多く出土します。今回の展示では、墓から出土する「土器」ではなく「管玉」を含む玉類に注目し、北関東から南東北の地域で、管玉がどのような状態で出土しているのかを検討し、紹介する展示を行いました。管玉以外にも、共存する土器から、時期や共通点などを検討するため様々な形式の土器を展示しました。

墓から出土する管玉

南東北から北関東の、弥生時代中期の墓で管玉が出土する遺跡は、確認できただけでも、福島県で二〇遺跡、茨城県で九遺跡、栃木県で六遺跡、群馬県で一遺跡、埼玉県で三遺跡、千葉県で一遺跡となり、圧倒的に福島県が多いことがわかります。

弥生時代に管玉を墓へ副葬し始めるのは、中期に入ってからです。中期前葉の遺跡では、主に滑石とよばれる灰色の小玉が出土しますが、その中に僅かに碧玉製の管玉の出土例がみられます。そして中期中葉になると再葬墓や土坑墓

1. 茨城県茨城県大洗町 一本松遺跡
2. 茨城県ひたちなか市 新堤遺跡
3. 茨城県ひたちなか市 柳沢十二所遺跡
4. 茨城県ひたちなか市 差洪遺跡
5. 茨城県水戸市 軍民坂遺跡
6. 茨城県日立市 十王堂遺跡
7. 茨城県常陸大宮市 泉坂下遺跡
8. 茨城県常陸大宮市 宿尻遺跡
9. 茨城県筑西市 女方遺跡
10. 栃木県宇都宮市 野沢遺跡
11. 栃木県壬生町 本学谷遺跡
12. 栃木県鹿沼市 高原遺跡
13. 栃木県鹿沼市 戸木内遺跡
14. 栃木県佐野市 出流原遺跡
15. 栃木県野木町 清久三遺跡
16. 群馬県みなかみ町 八束野洞窟遺跡
17. 埼玉県熊谷市 飯塚南遺跡
18. 埼玉県熊谷市 上敷先遺跡
19. 埼玉県深谷市 横間栗遺跡
20. 千葉県多古町 堤台遺跡



1. 只見町 窪田遺跡
2. 金山町 宮崎遺跡
3. 会津坂下町 経塚遺跡
4. 会津美里町 油田遺跡
5. 会津美里町 五本松遺跡
6. 会津若松市 墓科遺跡
7. 会津若松市 南御山遺跡
8. 会津若松市 一ノ堰B遺跡
9. 下郷町 五百地遺跡
10. 本宮市 陣場遺跡
11. 郡山市 柏山遺跡
12. 須賀川市 大久保A遺跡
13. 鏡石町 笹池上遺跡
14. 石川町 鳥内遺跡
15. 石川町 上森屋段遺跡
16. 白河市 滝ノ上遺跡
17. 榎倉町 産ノ上遺跡
18. 榎実町 天神原遺跡
19. いわき市 平窪跡街遺跡
20. いわき市 上ノ内遺跡

福島県と北関東周辺の弥生時代中期の管玉出土遺跡



福島県いわき市上ノ内遺跡第8号土器棺墓出土の
連なったような管玉



栃木県野木町清六川遺跡 SK-304 の管玉出土状況

様々な出土状態の管玉

から多くの点数が確認されるようになります。

碧玉製の管玉は、もともと日本にはなかった形の玉類です。弥生時代初頭に韓半島から北部九州へ碧玉製の管玉が伝わり、前期に日本で管玉の生産が開始されます。中期には生産技法が普及し、中期前葉から中葉になると、管玉の石材である良質な碧玉や緑色凝灰岩が産出する、北陸から山陰地方で大量の管玉が生産されます。そのため、全国に管玉が流通するのは、生産が盛んになる中期中葉になってからであり、手に入りやすくなった管玉が墓に多く副葬されるようになったと考えられます。

また、中期前葉から中葉では北陸西部と呼ばれる、石川県を中心とした地域で大規模な生産が行われていますが、中期中葉後半から後葉にかけては、北陸東部と呼ばれる、新潟県を中心とした地域でも盛んに管玉が製作されるようになります。この新潟県で管玉が作られる時期に、福島県でも土坑墓から管玉が多く見つかったため、隣接する新潟県から管玉を流入していた可能性も考えられます。ただ、福島県や北関東で確認されている管玉の多くは、石材の産地から、北陸西部で生産された管玉が利用されているという指摘があり、どのようなルートで管玉が広がっていったのかは、まだまだ研究が必要とされています。



茨城県常陸大宮市宿尻遺跡第1号土坑管玉出土状況



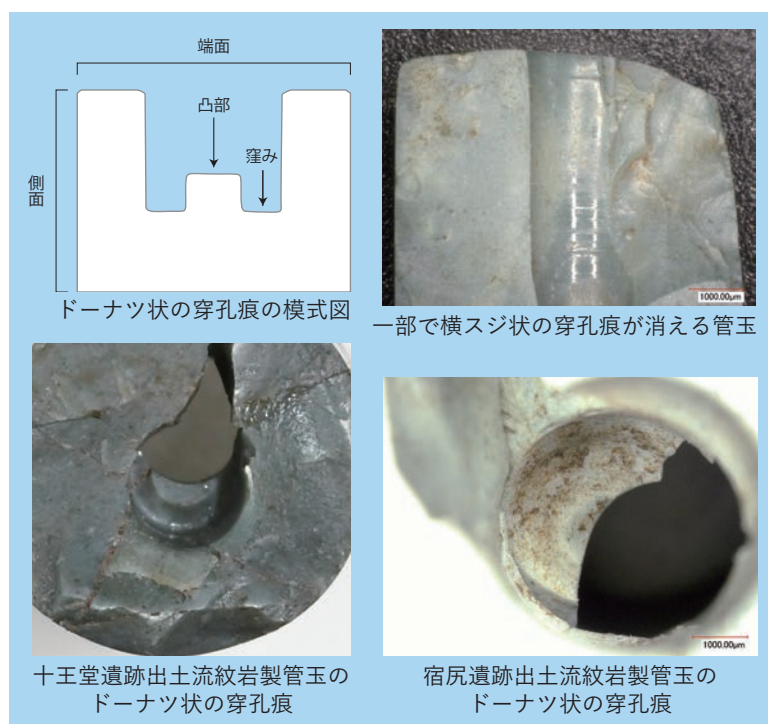
茨城県日立市十王堂遺跡第365号土坑管玉出土状況

破碎された管玉の出土状況



様々な出土状態の管玉

管玉の出土の仕方は、遺跡や時期によって様々です。再埋葬の土器の中や土坑墓に1～四個程度の少ない管玉を副葬するものや、首飾りとして連なった状態（上ノ内遺跡第8号土器棺出土管玉）で出土することがあります。特に注目されるのは、弥生時代中期中葉頃によくみられる、人の手によって故意に破碎（はさい）される管玉です。破碎された管玉（以下、破碎管玉）が出土するのは、再埋葬の性格をもつ遺跡が多い傾向があります。茨城県内には常陸大宮市小野天神前遺跡・泉坂下遺跡、那珂



市海後遺跡、稲敷市殿内遺跡など九遺跡で再葬墓が確認されており、そのうち宿尻遺跡と人面付土器が出土している筑西市女方遺跡で破碎管玉が確認されています。また、日立市十王堂遺跡では、土坑墓で管玉の破碎が確認されています。

破碎管玉は、再葬墓の土坑内にひとまとまりになって出土する場合と、割れた土器の内側に乗った状態で出土する場合（清六Ⅲ遺跡SK-三〇四出土管玉）があります。前者は、土坑を形成し、土器を並べた状態でその場で管玉を破碎、もしくは破碎した管玉を撒いた、後者は、破碎した管玉を土器の中に入れてから埋葬したと考えられます。また、管玉は横置きで打撃をうけて破碎されるものと、縦置きで破碎されるものがあります。破碎管玉の観察から、福島県と茨城県北部の管玉は主に横置きで、茨城県南部から栃木県では主に縦置きで破碎している傾向が見られました。また一度だけ敲くのではなく、何回か打撃を与えており、非常に細かくなつて検出されます。

破碎管玉は、福島県で最も多く確認されており、金山町宮崎遺跡、会津若松市南御山遺跡・墓料遺跡、石川町島内遺跡など再葬墓と考えられている七遺跡で出土しています。その破碎行為がよくわかる資料が宮崎遺跡から出土しており、土器を埋設した土坑の脇から破碎された管玉・独鈷石が出土し、さらに破碎のときに使用

されたと考えられる敲石が出土しています。

この管玉を破碎するという行為について、玉類には魂が宿っており、その魂を破碎することで解放するという説があり、埋葬時に故人を送る祭祀が行われていたと考えられています。

破碎管玉から得られる情報

普通、完形品の管玉では、穿孔痕など内側の観察はできませんが、破碎管玉ではそれが可能です。管玉の穿孔は、石製の錐を回転させて孔をあけますが、その際に生じた回転の横スジが孔内に残ります。それが宿尻遺跡の破碎管玉では明瞭に観察できます。また、その穿孔痕が途中から消えている個体があります。それは、管玉に紐を通して首飾りとして使用していたときに、紐との摩擦によって、横スジが消えてしまったためと考えられます。

さらに、宿尻遺跡の流紋岩製の管玉（写真掲載⑥）には、穿孔時にうまく貫通できず残ってしまった部分で、ドーナツ状の窪みと、中心に凸部が観察できました。普通は、打製や磨製の石錐を使用し孔をあけるところを、中が管状になっている穿孔具であけたことにより、このドーナツ状の痕跡ができたと考えられます。例としては、中が中空になっている植物の茎があげられますが、実際どのような工具を使用したかは不明です。この特徴は、十王堂遺跡の流紋岩製管玉でも観察でき、写真で掲載している6・7の管玉にドーナツ状の痕跡がみられました。

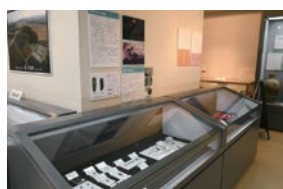
特に6には、両側に痕跡があります。

流紋岩製の管玉は、全国的に出土例が碧玉製の管玉と比べると少なく、その流紋岩製管玉に、ドーナツ状の穿孔痕が残ることが、面白い特徴と言えます。まだ、見つからない流紋岩製の管玉を生産しているような遺跡が、どこにあるのかわかりません。

参考文献 大賀克彦 二〇〇一「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第八六巻 第四号 三二一—三二六頁、河村好光 二〇一〇『倭の玉器 玉つくりと倭国の時代』青木書店、田中美幸 二〇二二「2 宿尻遺跡第1号土坑の管玉について」『宿尻遺跡—久慈川・那珂川流域の再葬墓—』常陸大宮市教育委員会

今回の企画展の開催及び本誌への資料掲載にあたっては、下記の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。
(50 音順、敬称略)

いわき市教育委員会、いわき市考古資料館、茨城県教育財団、鹿沼市教育委員会、多古町教育委員会、栃木県教育委員会、栃木県立博物館、とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、常陸大宮市教育委員会、日立市郷土博物館、荒木麻衣、猪狩俊哉、石川優水、稲田均、大賀克彦、亀田幸久、河村好光、木幡成雄、斎藤あや、佐久間正明、佐藤有紗、澁川駿、島田佐智夫、下濱貴子、鈴木素行、戸村勝司朗、中林香澄、中村岳彦、中山真理、永岡弘章、本名隆二、齊藤啓太、馬籠和哉、宮田明、渡邊歩、渡邊真悠



展示風景

公開講座「ひたちなか市の考古学」第十五回 弥生時代の玉

令和五年二月一八日から三月一日に、公開講座「ひたちなか市の考古学 弥生時代の玉」を開催しました。講師には、弥生時代の玉製品や副葬品の研究者をお招きして、玉製品の石材や共伴遺物、出土状況などから、地域間の交流についてご講演を頂きました。

なお、今回の講座の内容については、後日、記録集を刊行する予定です。



月／日	演 題	講 師
2 / 18 (土)	弥生ビーズの世界	石川考古学研究会 副会長 河村 好光 氏
2 / 25 (土)	碧玉製管玉について	奈良女子大学 特任講師 大賀 克彦 氏
3 / 4 (土)	弥生中期の墓から出土する玉製品	(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 田中 美蓉
3 / 11 (土)	縄文のち弥生、ときどきサメ歯	常陸大宮市史編さん委員会 考古部長 鈴木 素行 氏

石川考古学研究会 河村 好光 氏



宿尻遺跡の管玉は、細いものはありませんで、比較的真ん中あたりと直径1.2 cmを超えるような極太のものが中心になっているんですね。それ以外のもの（北関東の遺跡など）は、中太あたりからですね、長身で極太のものが中心になっているわけですね。明らかに青森の出かたとは違いますよね。青森の出かたは、直径3 mm未満の極細が多くて、こちら（太型）はあるんですけど少ない。ところがですね、茨城の再葬墓をみると、基本的に太い方に集中しているんですね。ですから、極太型を含む太身の管玉を集めているという。これは、非常に強い地域性ということなんです。

奈良女子大学特任講師 大賀 克彦 氏



この管玉（領域Fの太形品）が流入していく流れのことなんです。猿八産のものが入っているけども、すごく少ないということを考えますと、これまでの研究では、関東に入ってくるルートとして距離的なことも含めて新潟くらいまで日本海で進んで、そこから南下してくるルートを考える傾向がありまして、それにしても関東周辺から出てくる領域Fの管玉は、女代神社南B群製の比率が高すぎると思うわけです。少なくとも、新潟県を通過してこの辺りでの交易や持ち手の変更が起こった後に、関東に南下したと考えるのは、現状では難しいと判断しております。

常陸大宮市史編さん委員会 鈴木 素行 氏



宿尻遺跡第1号土坑から、1つだけサメ歯が出てきたんです。これ私が自分で掘ったんです。まあびっくりしました。それで弥生時代のサメ歯を調べ始めることになりました。かなり小さな歯なんです。写真を大きく伸ばすと、メガロドンみたいに見えるんですけど、見ていただくと分かるように、先端が丸まっている、歯の縁にある鋸歯も消えかかっているということで、捕まえたサメから引っこ抜いたというような歯でないのは確かです。

歴史の小窓 その二九

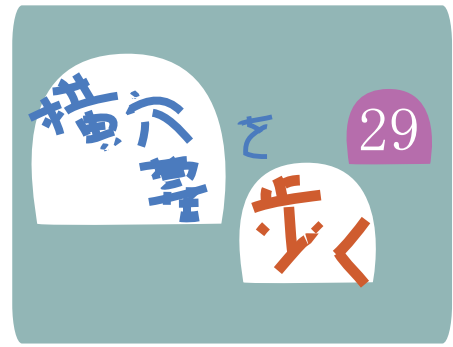
十五郎穴と正倉院の大刀

埋蔵文化財調査センターでは、昭和二五年に十五郎穴横穴墓群^{たてだし}出土^{たてだし}区第三二号墓から出土した、奈良時代前半頃^{はうのうたち}の方頭大刀^{ほうとうたち}を展示しています。奈良時代に大刀は国ごとに生産され、軍団の武器として備蓄されていました。そうした刀を、稲などの代価を払い配給を受け^{はいよう}佩用^{はいよう}した人物が葬られたのが、三二号墓であったと想像されます。

正倉院には、この刀によく似た大刀（中倉第一五号）があります。延喜式の規定によると、常陸国では毎年二十口の横刀の生産することになっていますが、そのうちの一派りは見本として中央に貢進され兵庫に納められていました。その常陸国から貢進された刀の一部が、なんらかの機会に正倉院に移された可能性があるのではないのでしょうか。十五郎穴と正倉院の大刀がそっくりなのは、そうした背景があったように思われるのです。（佐々木義則）

参考文献 津野仁三「『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館 中村光一九九五『令制下における武器生産について』『律令国家の地方支配』吉川弘文館、下向井龍彦二〇〇一『日本律令国家の軍制』『季刊考古学』第七六号、雄山閣出版





熊本市山鹿市
なべた
鍋田横穴群

佐治 健一
(山鹿市教育委員会)

山鹿市は熊本県北部の内陸部にあり、国指定史跡・鍋田横穴群は市西部、菊池川と支流・岩野川の合流点近くの阿蘇溶結凝灰岩の崖面に三〇〇mにわたって築かれています。岩野川沿いの崖面には鍋田横穴群のほか熊本県指定史跡の付城横穴群、城横穴群があり、いずれの横穴群でも装飾を持つ横穴が確認されています。また、崖の上の台地には装飾古墳として知られる国指定史跡チブサン古墳、オブサン古墳が立地し、岩野川沿いは装飾古墳、横穴の密集地域として知られています。鍋田横穴群は大正十一年（一九二二）チブサン古墳とともに国指定史跡となり、これまでに六十一基が確認されています。横穴群は十群ほどに分けることができ、十六基で装飾が確認されています。横穴の構造は複室の一基を除いて単室で、「コ」の字形屍床（ししよく）を持つものと平坦屍床（へんたんししよく）を持つものが混在しています。横穴の多くが方形の羨門（せんもん）と

飾り縁を持ち、玄室天井が寄棟、家形をしています。羨門や飾り縁がアーチ形、玄室天井がカマボコ形やドーム形のものも散見されます。

装飾を持つ横穴は群全体に分布しており、装飾の位置は外壁と玄室内壁の二種類があります。また、装飾には線刻と浮彫があり、赤色顔料が残るものもあります。

装飾を持つ横穴で最も有名なものは二十七号横穴で、玄室平面形は横長の方形、幅約二・五m、奥行き約二・〇m、高さ約一・五mを測ります。右壁が破壊されているため、現在、装飾が残るのは左外壁および奥壁で、左外壁には両腕を横に伸ばし、足を大きく開いた人物。人物の腕の左に弓、弓の左に鎌を収めた鞍が表現されています。この他、鞍、刀子、盾、馬と考えられる動物等が浮彫されており、赤色顔料の痕跡が認められます。なお、現在は見ることができない

右壁の装飾については嘉永二年（一八四九）久留米藩士の矢野一貞が残したスケッチが「筑後将士軍談」に掲載されています。奥壁には連続三角文の線刻



写真1 鍋田横穴群



写真2 27号横穴

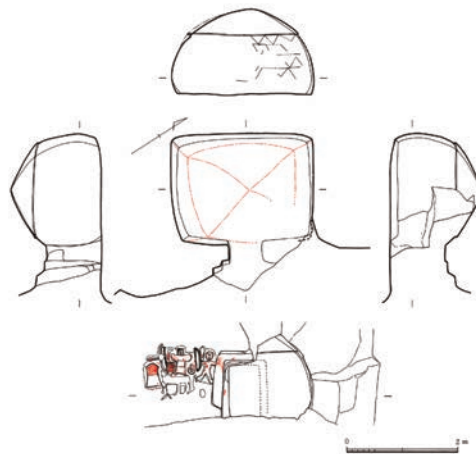


図1 27号横穴実測図

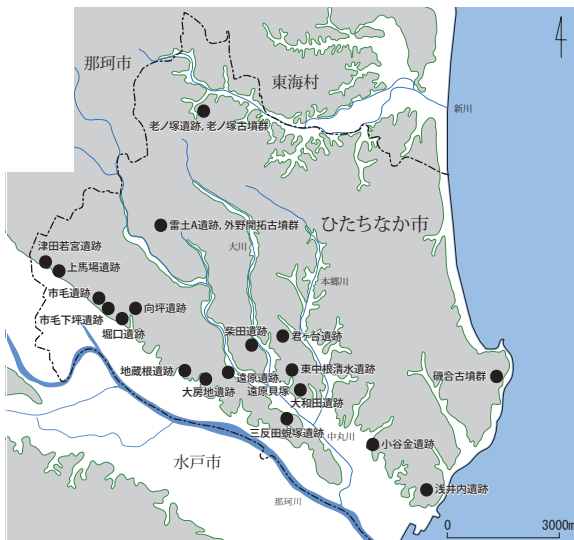
『熊本県装飾古墳総合調査報告書』より転載

が見られますが、後世、住居として使用された際のススが原因で不鮮明です。鍋田横穴群はいずれも古くから開口しており、遺物は表採によるもののみであるため正確な築造年代は分かりませんが、おおむね六世紀後半から七世紀前半ごろの築造と考えられます。

二〇二二年度の市内遺跡は、試掘調査28件、本調査2件の、あわせて30件の調査が実施されました。

市毛遺跡第6次調査では、市内では類例の少ない平安時代の土坑群が見つかりました。大きな深さから墓坑とみるには大きすぎると、畠作物を保存するための土坑ではないかと思われます。各地に類例があるようですが、全体的な様相はまだよくわかっていません。今後の研究に活用されることが期待されます。

津田若宮遺跡では四件の試掘調査が実施されました。そのうち三件の調査で縄文時代と思われる住居跡が確認されていますので、津田若宮遺跡の南側には縄文時代の集落が広がっているようです。



調査された遺跡の位置



市毛遺跡第6次調査区



市毛遺跡第6次調査区2号土坑(写真左), 3号土坑(写真右)

遠原遺跡では、中丸川の低位の段丘上で試掘調査が行われ、八基の住居跡が確認されました。住居跡の時代は、弥生時代中期が一基、古墳時代前期が五基、時期不明が一基であり、古墳時代前期の住居跡が多いことがわかります。二〇一八年に実施された隣接地での試掘調査でも、古墳時代前期の住居跡が確認されているので、この低位段丘上には古墳時代前期の集落が広がっていることが明らかとなりました。中丸川をさかのぼっていくと田彦に松原遺跡があり、そこも古墳時代前期の集落であることが知られています。中丸川に沿って古墳時代前期の集落が点在していることは、当時の開発ルートを知るうえで貴重な成果といえるでしょう。

(佐々木義則)



第五回で紹介するのは、不思議な形をした石器の独鈷石です。

独鈷石の名は、密教で煩惱を打ち砕く

という意味がある仏具の「独鈷杵」に形状が似ていることが由来です。縄文時代の後・晩期にかけて東日本の遺跡に多く出土します。左右対称の両端を研磨するものや、丸みをもつものなど様々な形がありますが、共通して中央に隆起した節や挟りがあります。この中央部分に柄を付けて石斧として使用した説や、実用的な形でないことから、祭祀道具として使用したなどの説があり、実際どのように使用されていたか不明な石器です。

市内では、昭和四六年（一九七二）に柳沢にある大田房貝塚の発掘調査で、2点の独鈷石が出土しています。今回イラストにしたものは、片方が欠けたもので、中央にやや三角状の突起があり、良く研磨されているのが特徴です。

(田中美零)



2022（令和 4）年度市内遺跡調査一覧表

No.	遺跡名	次数	所在地	種別	時期	遺構・遺物
1	しばたいせき 柴田遺跡	6 次	中根	試掘	4 月	住居跡 1 基（縄文中期）、土坑 1 基を確認。縄文土器が出土。
2	いちげいせき 市毛遺跡	6 次	市毛	本調査	4 月	住居跡 2 基（奈良，時期不明）、土坑 5 基を確認。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品が出土。
3	いちげいせき 市毛遺跡	7 次	市毛	本調査	4 月	住居跡 1 基（古墳後期）を確認。土師器、須恵器が出土。
4	こやがねいせき 小谷金遺跡	1 次	小谷金	試掘	5 月	なし
5	むかいつばいせき 向坪遺跡	7 次	堀口	試掘	5 月	住居跡 7 基（古墳，奈良），溝跡 1 条，ピット 1 基を確認。弥生土器，土師器，須恵器が出土。
6	ひがしなわしみずいせき 東中根清水遺跡	6 次	中根	試掘	5 月	なし
7	いさあいこふんぐん 磯合古墳群	8 次	磯崎町	試掘	5 月	溝跡 2 条を確認。出土遺物なし。
8	しばたいせき 柴田遺跡	7 次	中根	試掘	6 月	なし
9	しばたいせき 柴田遺跡	8 次	中根	試掘	6 月	ピット 1 基を確認。出土遺物なし。
10	きみがだいせき 君ヶ台遺跡	15 次	中根	試掘	7 月	遺構なし。縄文土器，石器が出土。
11	いちげいせき 市毛遺跡	8 次	市毛	試掘	7 月	土坑 2 基，焼土遺構 1 基，ピット 1 基を確認。土師器，須恵器，近世土器，磁器，銅銭，銅製品，石硯が出土。
12	しばたいせき 柴田遺跡	9 次	中根	試掘	7 月	なし
13	いかづちえいせき 雷土 A 遺跡 そとのかいたくこふんぐん 外野開拓古墳群	1 次 1 次	東石川	試掘	7 月	土坑 1 基を確認。縄文土器が出土。
14	ほりぐちいせき 堀口遺跡	39 次	堀口	試掘	8 月	住居跡 4 基（古墳，時期不明），土坑 3 基，ピット 13 基を確認。弥生土器，土師器，須恵器，陶器が出土。
15	つだわみやいせき 津田若宮遺跡	12 次	津田	試掘	8 月	住居跡 4 基（弥生以前，古墳，時期不明）を確認。縄文土器，弥生土器，土師器が出土。
16	つだわみやいせき 津田若宮遺跡	13 次	津田	試掘	8 月	住居跡 2 基（時期不明），溝跡 1 条，ピット 1 基を確認。出土遺物なし。
17	いちげいせき 市毛遺跡	9 次	市毛	試掘	8 月	住居跡 1 基（時期不明），土坑 1 基を確認。土師器，須恵器が出土。
18	かみばばいせき 上馬場遺跡	8 次	津田	試掘	9 月	住居跡 2 基（古墳，奈良）を確認。土師器，須恵器が出土。
19	じそうねいせき 地藏根遺跡	8 次	勝倉	試掘	10 月	溝跡 1 条を確認。出土遺物なし。
20	おいのづかいせき 老ノ塚遺跡 おいのづかこふんぐん 老ノ塚古墳群	3 次 3 次	稲田	試掘	10 月	なし
21	つだわみやいせき 津田若宮遺跡	14 次	津田	試掘	11 月	住居跡 1 基（縄文），溝跡 1 条，ピット 13 基を確認。縄文土器，土師器，石器が出土。
22	つだわみやいせき 津田若宮遺跡	15 次	津田	試掘	11 月	住居跡 1 基（縄文），溝跡 1 条を確認。縄文土器，土師器が出土。
23	とほらいせき 遠原遺跡 とほらいづか 遠原貝塚	6 次 6 次	金上	試掘	12 月	住居跡 8 基（弥生，古墳，時期不明）を確認。縄文土器，弥生土器，土師器が出土。
24	あさいないせき 浅井内遺跡	5 次	浅井内	試掘	12 月	溝跡 2 条を確認。出土遺物なし。
25	いちげいせき 市毛遺跡	10 次	市毛	試掘	1 月	住居跡 12 基（古墳～平安），土坑 10 基，ピット 23 基を確認。土師器，須恵器，石製模造品，近世陶器が出土。
26	いちげいせき 市毛下坪遺跡	23 次	市毛	試掘	2 月	住居跡 5 基（奈良・平安），溝跡 1 条，土坑 6 基，ピット 2 基を確認。土師器，須恵器，近世陶器が出土。
27	いちげいせき 市毛下坪遺跡	24 次	市毛	試掘	2 月	住居跡 4 基（奈良・平安），溝跡 2 条，土坑 2 基，ピット 3 基を確認。土師器，須恵器が出土。
28	おおぼうちいせき 大房地遺跡	21 次	勝倉	試掘	2 月	住居跡 2 基（縄文），溝跡 2 条，土坑 5 基，ピット 4 基を確認。縄文土器，須恵器，砲弾破片が出土。
29	おおわだいせき 大和田遺跡	6 次	中根	試掘	3 月	なし
30	みたんだいづかいせき 三反田親塚遺跡	8 次	三反田	試掘	3 月	土坑 3 基，ピット 2 基を確認。縄文土器が出土。

馬渡埴輪製作遺跡調査と大塚先生

令和四年七月二十一日、大塚初重先生が亡くなったとの報を受け、走馬灯のごとく、在学時代、歴史館時代にお世話になったことが思い出された。昭和三十八年四月、明治大学史学地理学科考古学専攻に入学したときは、考古学と言う学問をまったく知らなかった。助かったのは、主任教授の杉原莊介先生の方針が、一年生はまず考古学の基礎を習得するために、遺跡の測量実習や、土器の実測図の作成、拓本の採り方などの基本を身に付けることであつた。

一年生のときの測量実習は、昭和三十八年十一月二十四、二十五日、石岡市舟塚山古墳が三、四年生の測量実習地として選ばれ、一年生の私に加えられていた。この実習で先輩達の洗礼を受けたが、古墳測量を習得したときでもあつた。また、特別な印象としては、早朝上野駅に集合したとき、アメリカ大統領ジョン・F・ケネディが暗殺されたとラジオが伝え、夜には、旅館で、初めての衛星電波による暗殺映像をみたことである。

二年生になると、測量実習のほかに、研究室の調査で、立木貝塚、日本考古学協会の加曾利貝塚など縄文遺跡を主に調査していた。

と書かれていた。すぐに、大学の先輩で、勝田市に住んでいる川崎純徳さんに連絡し、二日、勝田駅で合流し、中学生の案内で、現地を調査した。現場は、浅い支谷が入り込み、水田になつている。それに面するところは、平坦な台地が広がっている。その平坦な台地にはところどころ穴が開いており、埴輪の破片や焼土が見られる。この状況から考えられるのは、埴輪を焼いた窯跡ではないかと川崎さんと意見が一致し、正月明け、研究室で大塚先生に状況を説明した。

調査は、昭和四十年八月五日から昭和四十三年九月二日までに平均三週間の調査を第七次までおこなっているが、私が参加したのは第一次（A地区）、第二次（B地区）、第四次（C地区）調査である。

先生を含め、調査する生徒の誰もが埴輪窯の調査は初めてで、ある意味では手探りの状態であつた。大塚先生は、各方面に声をかけ、現地指導をお願いしている。それに答えて、斉藤忠先生、高井悌三郎先生、渡辺直徑先生、大川清先生など現地にこられ、われわれは貴重な教示をいただいた。特に、大川清先生は、常陸太田市の太田山埴輪窯跡の調査をしており、窯の掘り方についてより厳しく指導していただいた。

大塚先生から学んだことは、面子にとらわれないうで、遺跡を生かすためには、最善の調査をおこ

阿久津久

なうことであつた。

このことは、昭和四十八年に、歴史館ができたことで茨城県に戻った私に、大塚先生から虎塚古墳の調査を手伝ってくれと依頼があり参加したときも、研究室の科学的データを得るために東京国立文化財研究所に依頼し、装飾壁画の撮影には教える子の写真家に依頼し、これまでと変わらなく遺跡を生かす最善の手段をとっている姿を見せられた。

晩年は、なかなかお会いすることもなく、令和二年一月二十六日の明治大学考古学専攻七十年記念同窓会が最後になってしまいました。合掌



馬渡第2次調査のときの写真。中央が大塚先生。(阿久津)

大塚初重先生 1926年東京生まれ。明治大学名誉教授。ひたちなか市では、馬渡埴輪製作遺跡や虎塚古墳、十五郎穴横穴墓群などを調査され、ひたちなか市史跡保存対策委員会委員長などを務められた。2022年逝去（享年95歳）。
* 11頁の写真は2007年撮影 小笠原文恵氏提供



虎塚古墳は全長五六mの中型の前方後円墳で、均整がとれ自然崩壊や盗掘跡もなくよく保存された古墳である。明治大学考古学研究室では、市史編纂事業の一環として、勝田市の代表的な古墳を発掘する必要があった。地主の西野茂信^{しげのぶ}さんは「明治大学の大塚先生ならぜひ発掘してほしい。」と発掘調査を快諾されたという。

わたしは地元大学生として、夏季休暇のあいだ虎塚古墳の発掘調査に参加することができた。発掘前の墳丘測量から参加したので、古墳をじっくり観察する機会があった。

第一次発掘調査は一九七三（昭和四八）年八月一六日、墳丘の伐採から始まった。八月二二日からいよいよトレンチを設定して、発掘調査に取り掛かった。二八日にはトレンチ内に墓道と石室の閉塞を確認した。実は今回の石室調査にあたって前年一九七二年に発見された高松塚古墳の石室壁画の保存資料として、未開口石室の内部空気の採取を目的にしていた。

八月三〇日、夏季休暇が終了するためこの日がわたしの虎塚古墳発掘の最終日だったので、大塚・小林三郎^{こばやしちろう}先生が配慮して、石室入口の清掃発掘に参加させてくれた。丁寧に閉塞石に堆積した土をはがしていったところ、ぽっかりと穴があき、先生方があわてて土嚢^{どのおう}でその穴をふさいだことを覚えていいる。記念シンポジウムでもこの出来事が紹介されたので、重大なミスではなかったのだろう。このときに開いた穴からパイプを通して内部空気のサンプリングを行ったと後に聞いた。実際には石室の扉石とその前の閉塞石の間に空隙があったようである。

九月一二日が石室開口の日だった。私は九月から授業が始まっていたので、午後から見学する予定だった。駅までわざわざ迎えに来てくれた鴨志田^{かもした}篤^{あつし}氏の第一声が「壁画がでたぞ。」であった。わけがわからないまま現場に到着す

ると、見学者、報道、調査の交通整理で大混雑が起こっていた。大塚・小林両先生は調査をオープンなものとして石室開口を一般公開していたので、混雑を予想して現場の説明と整理にあっていた。

開口予定は午前一〇時だったが扉石が玄門部にきっちりとはめ込まれていたため、これを外すのに予想外の時間がかかった。現場ではよく起こりえる事態だが、そのとき茨城県文化課が視察に来ており、作業が予定通りに進まないことに立腹して帰ってしまった、という話を後で聞いた。せっかくの機会を逃してしまった不幸には同情する。その後、新聞でも大きく報道され多くの見学者が訪れた。印象深いのは著名な教授が訪れた際に、「五〇〇年前のローマの壁画のほうが優れている。」と語ったと明治大学の学生から聞いた逸話である。耳を疑ったが、その後その話は再び聞いた覚えがないので、伝説の類なのだろう。

夕方になり、一般見学が終了して説明に追われていた大塚・小林先生もようやくほっとした様子だった。来訪者も絶えた時間に友人から借用したカメラで壁画を撮影する許可をお願いした際に、両先生から笑顔で了解をいただいたことを今でもはつきりと想い出す。

虎塚古墳調査と大塚先生

みやうち よしたか
宮内 良隆

一九六九年三月、弟が音楽大学受験のため上京して予備校へ通うことになり、両親から言われて同居生活することになった。父の従姉の紹介で、池上から練馬区貫井町に引越した。二階の部屋は台所と押入れが付いた西陽の射す八畳間で、目白通りに近かった。上京した弟は、毎日江古田にある大学のレッスン室へ通い、寝言でも暗譜するくらいピアノに向かい、確か部屋代は月六千円だったと記憶している。穴塚古墳群の調査から戻り、あわてて荷物をまとめて引越したため、本は池上の丸子旧邸に置いたままになったものが多かった。三月二五日、上京した弟を残して瓦塚^{かわらづか}瓦窯跡の調査に参加のため、常磐線で石岡駅に下車し、バスで八郷町（現石岡市）柿岡へ向かった。瓦塚の調査については穴塚古墳群調査の際、西宮一男先生より誘われており、瓦塚の場所も詳しく知らないまま柿岡に到着。

柿岡には同期である佐藤^{さとう}正好君の実家があり、以前に二度ほど訪問したこともあって、地理的にはあまり不安はなかった。バスを降り、町役場の隣にある佐藤家を訪問。佐藤家には彼の母上が一人で暮らしており、瓦塚の発掘に参加するため二三日泊めてほしいとお願いした。お母さんには承諾を得たので、瓦塚のだいたいの場所を聞き、自転車を借りて向かった。当時はまだ舗装されずに砂利道で、途中で丸山古墳^{まるやま}の看板を見たりしながら瓦谷に入ると、右前方の赤茶けた山の斜面に人が動いているのが見えた。そこが瓦塚瓦窯跡

私的茨城考古学外史—遺跡・人 出会いと別れ—

第7回 発掘三昧への道 県内編4 瓦塚瓦窯跡



2013年瓦塚瓦窯跡調査時の遺跡遠景

*稲田健一氏提供



瓦吹 堅

だった。土地所有者が南傾斜面の雑木林を開墾したところ、瓦窯跡が複数発見され、茨城県教育委員会が茨城県考古学会に調査を依頼。調査は県立八郷高校教員の西宮一男先生を中心に進められ、地元の高校生二〇名ほども参加しており、私は二五日午後から調査に加わった。翌日からは町役場が用意した送迎バスで現場往復。私は西宮先生や太田二高の関根忠邦先生の指示で、調査区の全体測量図を作成した。

私の調査メモなどを見ると、瓦塚の調査は一九六九年三月と記されているが、旧八郷町や石岡市発行の解説書などには「昭和四三（一九六八）年に調査された」と書かれており、記憶違いかと思った。その旨石岡市教育委員会の谷仲俊雄氏^{やなかとしお}に問い合わせると、私の思うとおり調査は一九六九年三月であることが判明し、石岡市でも一九六八年は間違いであったことが判明したと谷仲氏から回答を得ることができた。谷仲氏が旧八郷町の調査関係書類を探索した結果、当時の記録写真が出てきたとのことで、コピーを依頼して掲載許可を申請し、承諾いただいた。1の写真には、東側窯跡の焚き口部調査が進む中、西宮先生（中央）と関根先生（左側）が話をしている様子が写り、2の写真には平板の左奥にポールを持ち、煙草をくわえながら西側瓦窯跡の測点を指示して平板に戻るヤツケ姿の若い私が写っていた。

調査の目鼻が付いた二七日、夕食を食べてい

るところへ佐藤君が帰省。「何故おまえが居るんだ」とかなり驚いていた。瓦塚の発掘のことを説明し、その夜はいろいろな話をしながら二人枕を並べて寝た。

次の日、帰省していた彼の従兄が東京へ戻るといので、彼の車に二人で同乗して東京に向かう。私は千葉県柏市中馬場^{なかばば}遺跡の調査に参加するため、国道六号線の我孫子市根戸で車を降りて調査に参加した。この調査については別稿で後述する。

二〇一〇年頃と記憶しているが、県南部での遺跡見学の帰路、瓦塚窯跡を調査中と聞いて、約四十年ぶりに

瓦谷街道を北に向かつて走り、瓦谷に入る。しかし瓦塚窯跡の場所が判らない。一九六九年の調査参加の時は、開墾で茶色になった山肌をすぐ発見することができたが、長い時間が経っているため景色が一変。昔の

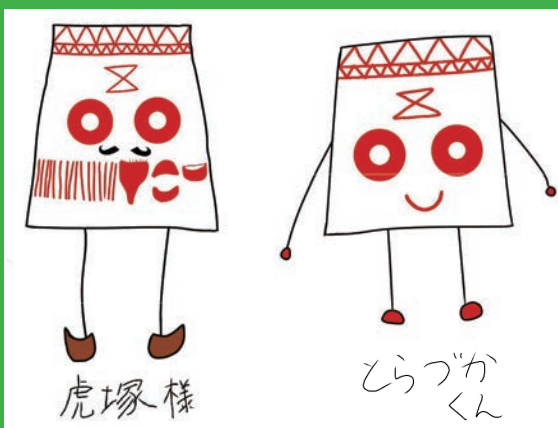


写真1 打ち合わせ中の西宮先生（中央）と関根先生（左）



写真2 調査風景 *写真1・2とも石岡市教育委員会提供

記憶を辿りながらやっと窯跡に着くと、教育委員会の小杉山^{こすぎやま}大輔氏が、国史跡指定に向けての調査を実施しており、確認調査の概要を話してくれた。瓦塚窯跡は、その後数回の確認調査を経て二〇一七年、常陸国府や国分寺などへの瓦供給する造瓦体制を、七世紀から一〇世紀前半まで継続した瓦窯跡として国の史跡として指定された。その発端は、一九六九年三月の調査であり、今は亡き西宮一男先生や関根忠邦先生、そして発掘に参加した方々、さらに国指定に向けて尽力された石岡市教育委員会の皆さんにも敬意を表したい。



第16 回ふるさと考古学受講生 遠藤夏葵さんの作品

虎塚古墳壁画発見 50 周年記念
宣伝キャラクター

虎塚古墳出土の土器

稲田 健一



虎塚古墳は、7世紀初め頃に築造された墳丘長 56.5 m の前方後円墳です。埋葬施設の横穴式石室の壁面には、赤色顔料によって幾何学文や武器・武具類が描かれています。虎塚古墳の調査では、装飾のある石室の調査が注目されがちですが、今回は石室以外の調査に注目し、虎塚古墳の年代を知る上で大変重要な土器と、土器が出土した遺構について考えます。

はじめに

虎塚古墳では、一九七三年と一九七四年、一九七六年の合わせて三回の発掘調査を実施している。土器は、主に集石遺構と前庭部、前方部墳丘上から出土した(図1)。ここでは、すでに報告されている土器も含めて新たに図を作成し、土器の年代や土器が出土した遺構について検討する。

一 集石遺構と前庭部から出土した土器

①集石遺構について 集石遺構は、石室西側の墳丘くびれ部で確認した。確認した範囲は、南北約7m、東西約7mに広がっており、推定では石室近くまで広がっていると報告されている。つまり、この集石遺構は墳丘を築造する以前の旧地表面に構築されていることになる。

集石遺構の石はすべて凝灰岩で、風化が著しく地点によっては粉状となっていた。この遺構を確認した当初は「敷石遺構」としていたが、調査が進むにつれて礫群に不整合な点が多く、またレベルも不統一な面があり、意識的な配列ではなく旧地表面もしくはその僅かに上面に無雑作に礫を置いたと考えられることから、「集石遺構」と称したと報告書にある。集石遺構に伴う遺物は、コバルト色のガラス小玉の半欠が一点出土したのみである(図1赤丸が出土位置)。集石遺構の直上には、土師器と灰・焼土・木炭を含む黒褐色土が堆積していた。これらのことか

ら、この遺構が石室構築とかかわりのある一種の作業場とする見方と、石室構築に際しての地鎮祭的な性格の古墳祭祀の場所ではないかという二つの見方が報告されている。

集石遺構の性格について検討するため、小森

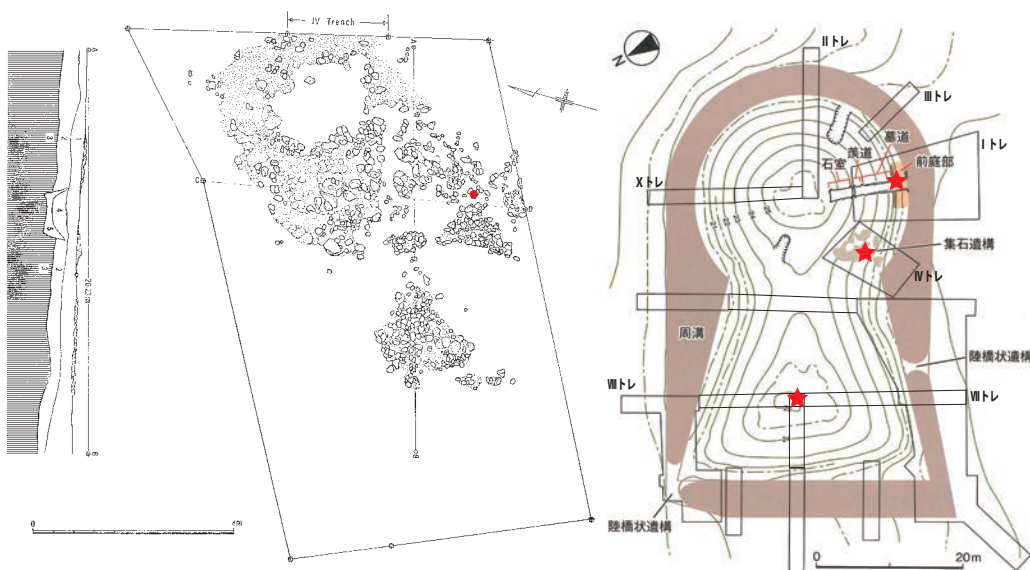


図1 主な土器出土位置(★印)と集石遺構実測図

哲也氏が指摘する「石敷遺構」の例を参考にする
「小森二〇二五」。

島根県松江市向山^{むこうやま}一号墳では、石室前庭部から、石室の石材と同じ凝灰岩片が多量に出土して、旧地表面上から土器が出土している。

熊本県氷川町岩立^{いわたち}C号墳では、石室築造時に火が焚かれた状況が確認されており（図2）、木炭と一緒に土師器の破片が出土している。虎塚古墳でも、集石遺構の直上から出土した土師器は灰・焼土・木炭を含む土層から出土しており、また墓道両側の墳丘の基底面上でも、あたかも対称的な位置で火を焚いたと思われる焼土塊や灰がみつかったている。

栃木県下野市山王塚^{さんのおづか}古墳では、古墳築造時の旧地表面から、石室の石材と考えられる凝灰岩の細片が石室を中心として広い範囲で確認されている（図3）。これは、恐らく墳丘を盛る前に当時の整地面に敷かれていたものと考えられており、虎塚古墳と類似する。

まとめると、向山一号墳や岩立C号墳は、石室が見えている段階で土器を用いた葬送儀礼を行ったと思われる痕跡がある例となり、山王塚古墳では墳丘盛土前に凝灰岩の粉を旧地表面の全面に敷き詰め、これを墳丘基盤上の儀礼ではないかとしている例となる。これらの例を参考にして、虎塚古墳で確認した集石遺構の性格は、石室構築時の儀礼の場ではないかと推定する。

②土師器について 土師器は、先記の集石遺

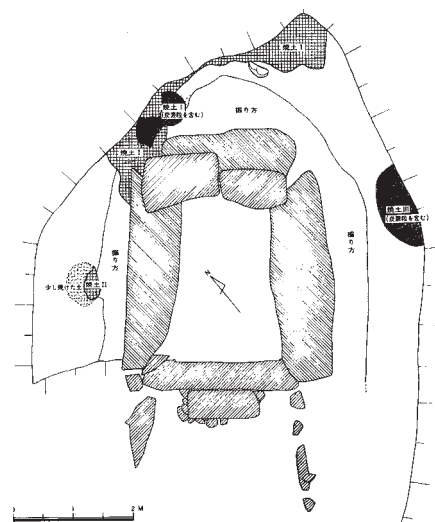


図2 岩立C号墳石室周辺平面図（[金山・瀬古 1998]より転載）

構以外に、石室前庭部の墓道両側の墳丘基底面上からも出土しており、どちらの土師器ともその出土位置から虎塚古墳築造時期を示す資料と考えられている。これら二つの地点から出土した土師器は、報告書には五〇〇点以上が出土したとされ、すべて破片資料である。器種は、甕形土器と杯形土器が主体となる。出土位置について、前庭部出土の土師器については図に★を付した。

甕形土器は、口縁部付近と底部付近を図化した。口縁部は、緩く開くもの、くの字状に開くもの、頸部がややコの字形で大きく開くもの、ほぼ直立するものがある。口縁部から続く胴部上位の状況から、胴部は球胴形よりも長胴形を呈すると考える。底部の外面には、使用痕跡として二次焼成をうけているのがわかる。

杯形土器は、口縁部と体部の境になにも有さずに内湾するものと、口縁部と体部の境に外稜

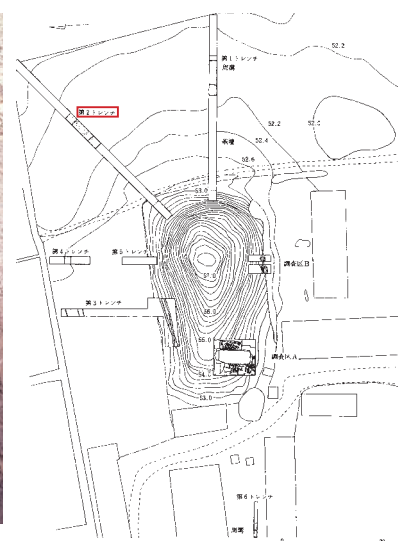


図3 山王塚古墳墳丘図と第2号トレンチ墳丘層位写真（図は[栃木県 1988]より転載、写真は栃木県より提供、写真青囲み部分に凝灰岩の層がみえる）

をもつて内湾するもの（第4図8～16）が主体で、その他に口縁部と体部の境に明瞭な段をもつて内湾もしくは直立するもの（17～19）、口縁部と体部の境に外稜をもつて直立するもの（20～23）、口縁部と体部の境に明瞭な段をもつて外反もしくは大きく外反するもの（24～26）がある。体部は、やや扁平な半球状を呈する。口径は復原し

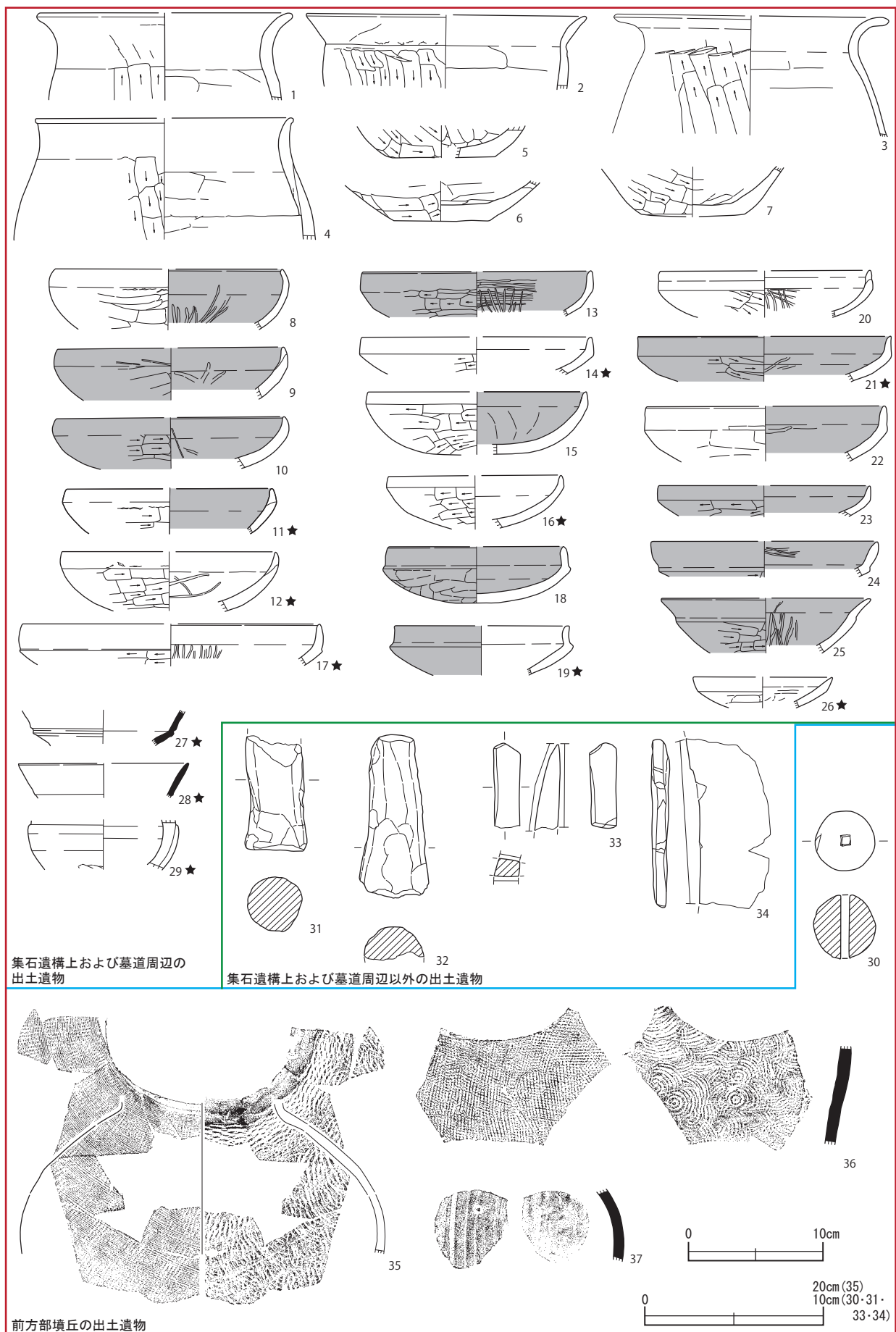


図4 虎塚古墳墳丘及び周溝出土遺物（★は前庭部出土）

集石遺構上および墓道周辺出土遺物観察表（単位：cm）

- 1 台帳：01406A415 材質：土師器 器種：甕 残存：10% 法量：口径（19.0）、器高（6.5） 色調：にぶい黄褐色 胎土：礫（茶微）、砂（白多、透多、黒少）、金雲母少 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 使用痕：なし 備考：Ⅳトレ（焼土面直上）
- 2 台帳：01406B613 材質：土師器 器種：甕 残存：口縁部 10% 法量：口径（20.8）、器高（5.4） 色調：外面橙～にぶい橙～暗褐色、内面橙～黄橙～黒褐色 胎土：礫（透微）、砂（白多、透多、黒多、赤微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 使用痕：口縁端部が摩滅している。 備考：報告書第 39 図 2、Ⅳトレ東拡張区
- 3 台帳：01406B518・B613 材質：土師器 器種：甕 残存：10% 法量：口径（20.4）、器高（8.9） 色調：外面橙色、内面橙～にぶい褐色 胎土：礫（透少、黒微）、砂（白少、透多、黒多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 使用痕：－ 備考：報告書第 39 図 3、Ⅳトレ東拡張区
- 4 台帳：01406B516 材質：土師器 器種：甕 残存：10% 法量：口径（19.2）、器高（9.0） 色調：外面にぶい橙褐色、内面橙褐色 胎土：小石（灰微）、礫（石微）、砂（白少、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：内面に若干の炭化物の付着がみられる。報告書第 39 図 4、Ⅳトレ東拡張区
- 5 台帳：01406B557・592 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 50% 法量：器高（2.4）、底径（4.0） 色調：外面橙～にぶい橙～暗褐色、内面黒褐色 胎土：砂（白少、透多、黒微） 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：外面器面が二次焼成をうけている。 備考：Ⅳトレ（灰層中）
- 6 台帳：01406B556・613 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 60% 法量：器高（3.0）、底径 7.1 色調：外面にぶい黄橙～暗褐色、内面にぶい黄褐色 胎土：小石（白微、灰微）、礫（灰微、茶微）、砂（白多、透多、黒少）、金雲母少 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：外面器面が二次焼成をうけている。 備考：Ⅳトレ東拡張区
- 7 台帳：01406B519 材質：土師器 器種：甕 残存：底部 60% 法量：器高（3.7）、底径 8.0 色調：外面赤橙～橙～褐色～暗褐色、内面橙～にぶい褐色 胎土：礫（白少）、砂（白少、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕：外面器面が二次焼成をうけている 備考：内面器面の一部が剥離している。報告書第 39 図 5、Ⅳトレ東拡張区
- 8 台帳：01406B618 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径（16.8）、最大径（17.8）、器高（4.5） 色調：にぶい橙～暗褐色～黒褐色 胎土：礫（白微）、砂（白多、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁～体部上位ヨコナデ、体部中～下位ヘラナデ後やや放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：口縁端部がやや摩滅している。 備考：Ⅳトレ東拡張区
- 9 台帳：01406A404 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（16.8）、器高（3.9） 色調：外面橙～黄褐～黒褐色、内面黄褐～黒褐色 胎土：礫（白微、透微）、砂（白少、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ・ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されていた可能性あり。 使用痕：口縁端部が摩滅している。 備考：表採
- 10 台帳：01406B518 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（17.0）、器高（3.8） 色調：暗褐～黒褐色 胎土：砂（白少、透多、黒微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、一部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理か。 使用痕：口縁端部が摩滅している。 備考：Ⅳトレ東拡張区
- 11 台帳：01406A64 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（15.4）、器高（3.4） 色調：外面赤橙～橙褐色、内面黄褐～黒褐色 胎土：砂（白少、透多、黒多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ？ 内面黒色処理か？ 使用痕：－ 備考：外面器面が二次焼成を受けている。Ⅰトレ東拡張区
- 12 台帳：01406A128 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径（16.0）、器高（4.4） 色調：黄褐～暗褐～黒褐色 胎土：礫（白微）、砂（白多、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部軽いヨコナデ、体部ヘラナデ、一部ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：Ⅰトレ東拡張延長
- 13 台帳：01406B569 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（17.0）、器高（3.4） 色調：黒褐色 胎土：礫（白微）、砂（白少、透多） 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：Ⅳトレ
- 14 台帳：01406A110 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（17.0）、器高（2.8） 色調：にぶい橙～暗褐色 胎土：砂（白少、透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。 使用痕：－ 備考：報告書第 39 図 11、Ⅰトレ東拡張延長
- 15 台帳：01406B613 材質：土師器 器種：杯 残存：20% 法量：口径（16.2）、器高 4.7 色調：外面にぶい黄橙～暗褐色、内面黄橙～暗褐色 胎土：砂（白多、透多、黒多、赤少）、金雲母少 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。内面黒色処理か？ 使用痕：口縁端部が摩滅している。 備考：報告書第 39 図 15、Ⅳトレ東拡張区
- 16 台帳：01406A77 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（12.8）、器高（4.0） 色調：にぶい橙色 胎土：礫（透微）、砂（白少、透多、黒微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。 使用痕：－ 備考：報告書第 37 図 4、Ⅰトレ東拡張延長
- 17 台帳：01406A6 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（22.0）、器高（3.1） 色調：橙～にぶい褐色 胎土：砂（白少、透多、黒少、赤少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後放射状にヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：報告書第 37 図 5、Ⅰトレ
- 18 台帳：01406B583 材質：土師器 器種：杯 残存：30% 法量：口径（13.2）、稜径（14.0）、器高 4.2 色調：橙～暗橙～黒褐色 胎土：礫（透微）、砂（透多、黒少）、骨針微 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面ヨコナデ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：口縁端部が摩滅している。 備考：報告書第 39 図 8、Ⅳトレ石敷
- 19 台帳：01406A41 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（13.0）、稜径（13.7）、器高（3.7） 色調：外面黒色、内面灰色 胎土：礫（白微）、砂（白少、透多）、骨針微量 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面ヨコナデ。外面黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：報告書第 37 図 1、Ⅰトレ延長
- 20 台帳：01406A241 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（15.6）、器高（3.5） 色調：橙～暗褐色 胎土：砂（白少、透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：報告書第 37 図 2？、周堀Ⅰ区
- 21 台帳：01406A106 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（19.0）、器高（3.4） 色調：黄褐～暗褐～黒褐色 胎土：礫（白微）、砂（白多、透多、黒少）骨針微量 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後一部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理か。 使用痕：－ 備考：内面器面の一部が剥離している。Ⅰトレ東拡張
- 22 台帳：01406B519 材質：土師器 器種：杯 残存：口径（17.8）、器高（4.1） 色調外面橙～にぶい橙～黄褐色 内面黄褐～黒褐色 胎土：礫（白少）、砂（白多、透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ。内面黒色処理か。 使用痕：口縁部の一部が欠損している。 備考：内外面とも器面の一部が剥離している。Ⅳトレ東拡張区
- 23 台帳：01406B566 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（15.8）、器高（2.3） 色調：黒褐色 胎土：砂（白少、透多、黒少） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁～体部上位ヨコナデ、体部下位ヘラナデ？内外面とも黒色処理されている。 使用痕：口縁頭部が摩滅している。 備考：Ⅳトレ東拡張区
- 24 台帳：01406A18 材質：土師器 器種：杯 残存：10%未満 法量：口径（17.0）、器高（2.7） 色調：にぶい黄褐～暗褐色 胎土：砂（白少、透多、黒微） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：Ⅱトレ
- 25 台帳：01406A421 材質：土師器 器種：杯 残存：杯部 10% 法量：口径（15.6）、器高（4.1） 色調：外面暗褐～黒褐色、内面黒褐色 胎土：礫（白微）、砂（白少、透多） 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後ヘラミガキ。内外面とも黒色処理されている。 使用痕：－ 備考：Ⅳトレ
- 26 台帳：01406A161 材質：土師器 器種：杯 残存：10% 法量：口径（10.4）、器高（2.3） 色調：褐色 胎土：砂（白少、透多）、骨針含む 焼成：良好 技法等：外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ、一部ヘラミガキ。 使用痕：－ 備考：Ⅰトレ東拡張
- 27 台帳：01406A93 材質：須恵器 器種：ハソウ 残存：口縁部 10% 法量：器高（2.5） 色調：外面灰色、内面灰～灰白色 胎土：硬質 技法等：外面口縁部と体部の境に沈線 1 条。 使用痕：－ 備考：Ⅰトレ東拡張延長
- 28 台帳：01406A196 材質：須恵器 器種：ハソウ 残存：口縁部 10% 法量：口縁部（12.6）、器高（2.6） 色調：外面灰白色、内面灰色 胎土：砂（白微） 焼成：硬質 技法等：ロクロ成形 使用痕：－ 備考：Ⅰトレ東拡張延長
- 29 台帳：01406A84 材質：須恵器 器種：不明 残存：10% 法量：最大径（11.2）、器高（3.7） 色調：外面灰色、内面灰～灰白色 胎土：礫（白微）、砂（透多） 焼成：硬質 技法等：ロクロ成形。外面下部一部ヘラ削り。外面沈線 1 条。 使用痕：－ 備考：Ⅰトレ延長
- 30 台帳：01406B540 材質：土師質 種類：土玉 残存：100% 法量：長 3.5、最大径 3.4、孔径 0.5、重量 38.59g 備考：穿孔は四角の工具を使って一方方向へ。Ⅶトレ墳頂部
- 31 台帳：01406B564 材質：土師質 種類：－ 法量：長 6.5、径 3.0～3.1 技法等：ヘラナデ・ユビナデ。 備考：ⅩⅠトレ周堀部
- 32 台帳：01406A20 材質：土師質 種類：支脚 残存：下部欠損 法量：高（12.2）、径 2.6～5.0 色調：橙～にぶい橙～黄橙～暗褐色 胎土：礫（白微）、砂（白多、透多、黒少、赤少） 焼成：良好 技法等：ヘラナデ・指ナデ。 使用痕：二次焼成をうけて大変もろくなっている。 備考：Ⅱトレ
- 33 台帳：01406A376 材質：珪化流紋岩 種類：砥石 残存：－ 法量：長 4.7、幅 1.4、最大厚 1.0、重量 12.41g 色調：灰白色、表面一部黒褐色 技法等：使用面 2 面 備考：Ⅲトレ延長
- 34 台帳：01406A375 材質：珪化流紋岩 種類：砥石 残存：－ 法量：長 9.4、幅 0.8、最大厚 3.9、重量 47.08g 色調：灰白～黒褐色 技法等：使用面 1 面。 備考：Ⅲトレ延長
- 35 台帳：01406B512・521・529・532・554・560・624・640 材質：須恵器 器種：甕 残存：頸部～胴部上位 20% 法量：頸部径（17.8）、胴部径（40.6）、器高（16.9） 色調：灰～黄灰色 胎土：礫（白少）、砂（白少、透多） 焼成：硬質 技法等：外面カキ目。内面青海波文の上に若干のヘラナデ。 使用痕：－ 備考：その他同一個体と思われる破片多数あり。報告書第 38 図 1、Ⅶトレ墳丘部ほか
- 36 台帳：01406B600 材質：須恵器 器種：甕 残存：胴部片 法量：－ 色調：灰白色 胎土：礫（白微）、砂（白少） 焼成：硬質 技法等：外面格子目文叩き痕。内面青海波文。 使用痕：－ 備考：Ⅹトレ周溝中央部
- 37 台帳：01406B646 材質：須恵器 器種：横瓶 残存：胴部片 法量：－ 色調外面暗灰色、内面灰色 胎土：砂（白少、透多） 焼成：硬質 技法等：外面に縦走する巻き上げがみられる。自然釉がわかる。球形。 使用痕：－ 備考：報告書第 38 図 7、Ⅶトレ

写真：集石遺構検出状況

た数値で16 cm前後を基本とし、12 cm前後と19 cm以上のものも含まれる。外面と内面、もしくはどちらかに黒色処理を施した例が多い。

土師器以外には、須恵器の礎^{はそ}と考える破片二点と器種不明の一点が前庭部から、土玉一点、土製支脚一点、棒状の土製品一点、砥石二点が前庭部・集石遺構以外から出土している。

時期は、甕形土器が長胴化傾向であること、杯形土器が主体となる器形や口径が16 cm前後と大きいこと、内面調整のヘラミガキが簡素化していること、「黒色の土器」の多さなどを、市内の集落跡から出土した土器の編年と比較すると、六世紀末から七世紀初め頃の時期と考える。この結果については、報告書で指摘されている時期を再確認することとなった。

二 前方部墳丘出土の土器

前方部の発掘調査では、墳頂部付近を中心に須恵器の大甕が出土している。墳頂部以外では、前方部の斜面部から周溝中でも出土しており、それらは墳頂部から転落したものと思われる。後円部墳頂や後円部周溝からは出土していないことから、前方部墳頂部に限定して須恵器が置かれていたと考える。出土した須恵器は全て破片で、大甕のほか横瓶と思われる破片が出土している(第4図35、37)。

虎塚古墳のように、墳頂部から須恵器の大甕が出土する例は多く、筑西市山ノ入^{やまのいり}二号墳(前

方後円墳・全長約25 m)では、墳丘上を中心に大甕が一四個置かれていた可能性がある。栃木県壬生町の車塚古墳^{くるまづか}(円墳・直径84 m)では、長胴の須恵器大甕が墳丘と周堤に埴輪のように並べられていたことが調査で判明している。

これらの古墳は、埴輪の樹立が終了した後に造られた所謂「終末期古墳」である。よって、この大甕からは、他の古墳と同様に虎塚古墳でも埴輪樹立終了後の大甕を用いた儀礼を知ることができる。

おわりに

以上、虎塚古墳から出土した土器と、土器が出土した場所から、虎塚古墳について検討してみた。結果として、墳丘と石室築造時に儀礼を行った可能性や、墳丘完成後の前方部上での大甕を使った儀礼の可能性を指摘できた。また、虎塚古墳の築造時期については、土師器の検討から従前どおり七世紀初めを再確認することができた。今後も、壁画も含め総合的に虎塚古墳についての検討を続けていきたい。

〈引用・参考文献〉

大塚初重・小林三郎 1978 『勝田市史別篇Ⅰ 虎塚壁画古墳』勝田市史編さん委員会／金山正樹・瀬古諒子 1998 『向山古墳群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書77 松江市教育委員会／小森哲也 2015 『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六 書房／栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 1986 『研究報告 国分寺町山王塚古墳第一 次発掘調査報告』『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第2号 栃木県教育委員会／田中裕ほか 2022 『壬生車塚古墳Ⅱ 国指定史跡保存活用計画作成に伴う学術発掘調査』壬生町埋蔵文化財調査報告書34 壬生町教育委員会

ワンケースミュージアム57

1 CASE MUSEUM Vol.57
虎塚古墳壁画発見50周年 プレ企画

虎塚古墳、再考!
謎は壁画だけじゃない

サイコー

石室内から出された遺物?
石室周辺の石敷の遺構?

令和4年
日時 10/15(土) 12/18(日) 休館日: 月曜日(祝日の場合は翌日)
開館時間: 午前9時~午後5時(入館は午後4時30分まで) 入場無料
場所 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 Tel.029-276-8311
※新型コロナウイルス感染症対策により、展示の中止や会期の変更になる場合があります。



展示風景

虎塚古墳の特徴である壁画についての研究は、発見当時から現在まで検討されていますが、それ以外の調査成果については、検討があまりされていないのが現状です。

今回の展示では、集石遺構やそこから出土した土器、墳丘上から出土した土器を展示し、集石遺構や掻き出された遺物の謎、墳丘上から出土した土器の意味などを再考しました。また、展示では、地元中根小学校五年の小石修也さんが製作してくれた虎塚古墳の墳丘模型も展示しました。

今回の展示は、二〇二三年の虎塚古墳壁画「面発見五〇周年」のプレ企画展示であり、今後も虎塚古墳関連の展示を開催する予定です。

★今回の展示と本誌への記事の掲載にあたっては、以下の機関及び関係者からご指導とご協力をいただきました。

栃木県教育委員会・栃木県埋蔵文化財センター・明治大学博物館

大内みなみ・忽那敬三・小石修也・小西竜世・小森哲也・篠原祐一・土生朗治・矢野徳也 (50 音順・敬称略)

文の々 埋センターの日 2022 後期

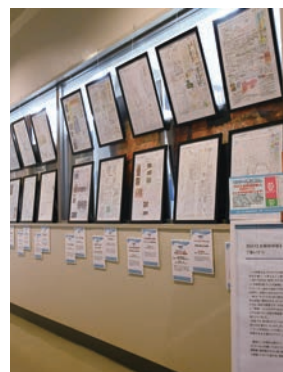
10月

ふるさと考古学⑥「ともにかがえる考古学」(講師：堀江武史氏・さかいひろこ氏)／二勝田中等教育学校「探求デイ」ゲスト参加
／15-ワンケース・ミュージアム
5「虎塚古墳、再考―謎は壁画だけじゃない―」開始／18-21地蔵根遺跡試掘調査／19 いばキラTV取材／25-老ノ塚遺跡・老ノ塚古墳群試掘調査開始／26 中根小学校1年生どんぐり拾い」



／30 国営ひたち海浜公園パネル貸出「沢田遺跡」／31「埋文だより」第57号刊行
11月

1-23 第2回キッズ考古学新聞コンクール2022全国巡回展



／一老ノ塚遺跡・老ノ塚古墳群試掘調査終了／3-6・10-13 虎塚古墳一般公開・ひたちなかユネスコ協会公開支援



／3ふるさと考古学⑦「虎塚古墳を知らう3」(講師：矢島國雄氏・さかいひろこ氏)／3ワールド航空サービス団体見学／4いちょう広場団体見学／6クラブツーリズム団体見学／10ワールド航空サービス・中根小学校6年生団体見学



／二勝田中等教育学校1年生・三反田小学校6年生見学



／16-18 津田若宮遺跡試掘調査／18茨城大学4年生菅谷こすず氏資料見学「武田石高遺跡土師器」／26ふるさと考古学⑧「フィールド探検」(講師：矢野徳也氏)



虎塚古墳
花便り
30 ツユクサ

今回ご紹介する花は、羽根を広げたように透明感のある青い二枚の花びらをひらく、小さな夏の花「ツユクサ(露草)」です。ツユクサはツユクサ科ツユクサ属の植物です。日本全土に生育しています。名前の由来は、「朝に花が開き、午後にはしぼんでしまう」という性質から、「朝露」とともに消えてしまう花」ということからとも言われています。

葉は長さ五〜八cmの先端が尖った形状をしています。花は花びらが三枚あり、羽の様に上を向いている二枚は大きく青色、下の一枚は小さく白色で目立ちません。黄色のおしべが一本、めしべが六本あり、花びらとの対比が可憐で鮮やかです。

この花は万葉集に登場し、「月草」などの文字で表記されています。名前の由来の性質から、儚い気持ちを詠んだ歌が多く、小さな花を愛でる日本人の美を感じることができる花ではないでしょうか。

(稲田健一)



2022.6.23

12月

③ 北茨城市歴史民俗資料館ふるさと子供考古学教室見学／④ ふるさと考古学⑨「虎塚古墳を知ろう」④（講師：鈴木康二氏・さかいひろこ氏）→



／⑥-⑧ 遠原遺跡・遠原貝塚試掘調査／⑦ 千葉県立関宿博物館資料返却【沢田遺跡製塩関連資料】／⑭-⑮ 浅井内遺跡試掘調査／⑮ ふるさと考古学⑩「とっても楽しい考古学」（講師：さかいひろこ氏）→



・ワンケース・ミュージアム57「虎塚古墳、再考！―謎は壁面だけ

じゃない」終了／② 東京都大田区立博物館資料返却【半分山遺跡出土勾玉ほか】

1月

「東海村歴史と未来の交流館まる博講座「海の古墳の被葬者にせまる」を報告／⑮ 十五郎横穴墓群指洪支群・館出支群近接地試掘調査／⑮ 茨城県考古学協会瓦研究実行委員会資料調査【原の寺瓦窯跡など】／③① 市毛遺跡試掘調査開始

2月

「茨城県立自然博物館より遺物返却／⑦-⑩ 企画展に伴う展示物の入替作業／⑦ 市毛遺跡試掘調査終了／② 第19回企画展「弥生時代中期の祈り―墓から出土する管玉

①開始・茨城大学人文社会科学部地域史シンポジウムにて虎塚古墳と臨海部の古墳群についての報告／⑭-⑮ 市毛下坪遺跡試掘調査／⑮ ひたちなか市の考古学第15回①「弥生ビーズの世界」（講師：河村好光氏）／②②「碧玉製管玉について」（講師：大賀克彦氏）／②② 大房地遺跡試掘調査開始

3月

①祝・入館者数二〇万人達成！



／③ 大房地遺跡試掘調査終了／④③「弥生中期の墓から出土する玉製品」（講師：田中美零）／②② 大和田遺跡試掘調査／②② 千葉市埋蔵文化財調査センターより遺物返却／②④「縄文のち弥生、ときどきサメ齒」（講師：鈴木素行氏）／②② 市青少年課主催射爆場跡地観覧会での説明／⑭-⑮ 三反田蛭塚遺跡試掘調査／②③-②⑥ ③① 虎塚古墳一般公開／③① 埋文だより『第58号刊行

入館者状況 (2022.10.1.～2023.3.31)

月	開館日数	個人 (人)	団体 (団体)	計 (人)
10月	26	214	1 (0)	215
11月	26	1388	9 (3)	1397
12月	23	136	5 (0)	141
1月	23	153	1 (0)	154
2月	24	209	3 (0)	212
3月	27	747	4 (0)	751
合計	149	2847	23 (3)	2870

○内は学校数

ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び（公財）ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は「市報ひたちなか」及び下記ホームページでお知らせします。
<https://hitachinaka-maibun.jp>

編集後記の 虎の子

年末の頃から、職場の車のバックミラーに鳥のフンがたくさん付く状態が見られるようになった。自然豊かで野鳥がたくさんいる環境の駐車場なので、最初はいつものことと気にしていなかったのだが、掃除してもすぐ次の日には汚れているので、さすがにちょっとおかしいなと思い始めた。そのうち、自分の車も被害に遭うようになり、犯人捜しをした結果が、掲載した写真である。犯人はキセキレイだった。キセキレイは、体長二〇cmほどの細身で尾が長く、お腹の黄色がとてもきれいな鳥である。九州以北のほぼ全国に繁殖しているそうだ。

インターネットで「キセキレイ 車」と検索すると、同じような被害(?)の例がたくさん見つかった。縄張り意識が強いそうで、鏡に映った自分を敵と勘違いしての行動らしい。年明けから、「墳(フン)活」だけでなく、「フン掃除」の日々も続きそうだ。



2023.1.15



50th Anniversary 2023

ひたちなか埋文だより 第58号

編集 公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

2023年3月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

ひたちなか市埋蔵文化財調査センターホームページ



* 入館者 20 万人目は、ひたちなか市立勝倉小学校 2 年生の古賀涼馬さんです。